

タイにおける「キット・ペン」学習概念の理論と実際 —多元的特性に着目して—

永田佳之

(国立教育政策研究所)

1. はじめに

20世紀は、政治・経済・社会など多くの分野で近代化が推し進められた百年であった。教育においても西欧近代型の学校教育がアジアやアフリカ、中南米諸国でも普及し、3Rs中心のカリキュラムや一斉授業が瞬く間に広まった。一方、近代的な学校教育の普及にとともに、各地で長い間継承されてきた伝統的な学びの中には衰微への一途をたどったものも少なくない。その過程では、伝統社会に固有の土着性と近代化との拮抗対立の図式が見られ、おしなべて前者は後者に凌駕されてきた。

いわゆる発展途上国と呼ばれる地域の教育に「開発」や「計画」が地域外から大々的に導入されるようになったのも、前世紀、特に1960年代以後である¹。先進国または国際機関によって「途上」の国の教育内容や方針が根幹から変えられ、住民の生活世界に急速な変容をもたらされた。開発の波にのまれ、アイデンティティを喪失していった民族は多く、現在、教育開発の功罪が問われている²。

しかし、各国の教育のすべてが伝統か近代かの二極に分けられ、住民らのアイデンティティはどちらかの二者選択に迫られ揺れているわけではない。世界各地での教育理論・実践には、必ずしも対立の図式パターンに絡めとられず、オルタナティブな発展形態をとるものも見出せる。実際には、西欧的な教育の基盤に立ちながらも土着的な特性が付与される教育もあれば、土着的な文化に基づいた実践の中にも西欧的なアイデアが生かされている教育もあり、様々なバリエーションが見ら

れるのである。

本研究では、オルタナティブな発展を体现している教育の一例として、仏教思想から生まれたにもかかわらず、仏教徒以外の人々の学習にも活用されているタイのキット・ペンと呼ばれる概念に焦点を当て、キット・ペンが宗教や民族を問わず各地で長年継承されている背景にはどのような特性があるのかを明らかにし、その現代的な意義についての考察を試みたい。

2. キット・ペンとは

2-1. キット・ペンの基本思想

キット・ペンは1970年代にタイで生まれた学習概念であり、その提唱者は、当時、教育省成人教育部長であったコーウィット・ワラピパットである。キット・ペンの基底には、人種や宗教を問わず人間が究極的に求めているのは幸福であるという彼の思想がある。コーウィットによれば、人間は自己と社会と環境とが調和のうちにあり³、しかも物質的、肉体的、精神的にバランスがとれているときに幸福(クワムスク)の状態になれる。幸福が妨げられるのは、人が問題に直面したとき、すなわち、現実に彼(女)が置かれている状態と望ましいと考える状態との間に隔たりがあるときである。したがって幸福になるためには、問題解決の仕方を心得た人間でなくてはならない。このような人間をコーウィットは「キット・ペン・マン」(考える技能を備えた人)と呼ぶ。

キット・ペンは問題解決のための思考プロセスでもある(図1参照)。このプロセスは

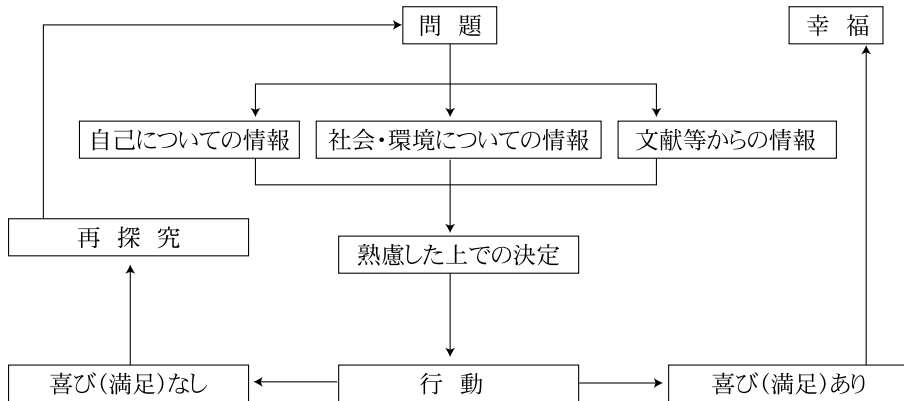


図1 キット・ベンに則った問題解決の過程

(出典：Oonta 1985：21および Damri 1998：27をもとに筆者が作成)

実際の問題から出発し、自己に関する情報と社会・環境に関する情報について熟考し、文献（書籍やテレビ等のメディア）による情報も取り込みながら、問題への対処法を考えていく過程である。これらの三つの情報を用いて、最善の行動の仕方を決め、問題がなくなる、つまり満足な状態になれば、この思考プロセスは完了する。しかし、満足な状態に至らなければ、つまり、何らかの問題が依然として存在するのであれば、この思考プロセスは再びはじまるのである。

2-2. 3種類の情報

キット・ベンの理論では、問題解決のための意思決定ができるようになるためには、上述の3種類の基礎的な情報、すなわち、自己に関する情報、社会・環境に対する情報、文献による知識（テクニカルな情報）が必要だとされ、キット・ベン・マンになるには、問題解決の際、これらの3種類の情報を併せて活用することが求められる⁴。

自己に関する情報は哲学や宗教、または現代心理学とも深く関連する。ソクラテスが「汝自身を知る」ことを強調したように、自己に対する探求は古代から賢人によって説かれてきた。また仏陀も、内省的であるように務め、

自らの考えを検証し、問題を解決することを重視した。キット・ベンでも自らの可能性や制約、長所や短所を知ることが求められ、自己の性格や習得している技術、財産等の情報が貴重な判断材料となる。農民が農業協同組合のメンバーになるか否かを決める際、自らの性格や生活時間、貯金などについて考えることが、この一例である。

キット・ベンではまた、自己のみならず他者や社会・環境に対する理解も重要視される。人間は孤立した生きものではなく、その存在自体がすでに社会の一部であり、社会性を負っているからである。日常生活での問題を解決するには、自身の至福のみならず社会にとって何が重要であるのかについて知らなくてはならない。したがって社会・環境に関する情報には社会規範や伝統・文化なども含まれる。東北タイ地方の伝統的な食生活で生肉を食べる慣習があるが、生肉が個々人の健康・衛生に与えかねない悪影響を考える一方で、その文化的な意義も考慮し、祭りのおきのみ衛生面に注意を払いながら食べるように食文化を変えていくことが、この情報を活かした形での問題解決の一例として挙げられる。

文献による知識（テクニカルな情報）とは、学校で習得されるような読み書き算や地理・

歴史等々の学習の結果、得られる情報であるが、学校での学習活動に限らず、新聞やラジオ、テレビ、その他のメディアを通じた情報も含まれる。エイズに関する情報を識字教育教材やインターネットを通して採り入れ、未然にエイズ禍を防ごうとすることが、この情報活用の一例である。

キット・ペンでは、以上の3種類の情報を併せて活用することにより人間は建設的に問題解決に取り組むことができ、それらの情報を総合的に採り入れた上での判断に基づく決定は、現況において彼（女）がなし得る最善の策であると考えられている⁵。つまりそれは、現実を取り囲む情報を収集・整理・活用することによって短絡的な考え方や偏った見方を是正しようとする思考プロセスでもある。コーウィットは、タイの日常生活で頻繁に用いられる慣習的表現である「マイペンライ」⁶に象徴される楽観性のためにタイの人々は現実の問題を積極的に解決しようとしないう傾向がある、と考えていたようだ（Oonta 1985：24）。日常生活の問題に前向きにアプローチし、知恵と知識をもって熟慮した後、行動するか否か、するとしたらどの可能性を試すのか、というふう思考する筋道をつけることによって、貧困等に苦しむ人々に生活改善の可能性を提供できる学習概念としてキット・ペンは考案されたといってもよい。キット・ペンを通して人々は、目前の難題を宿命として受け容れるのではなく解決可能な課題として捉え、生活や人生に対する態度を変えていく契機を見出すと考えられたのである。

2-3. キット・ペンと仏教の教え

キット・ペン思想の根幹は仏教の教えであるといつてもよい。周知のとおり、仏教思想の基本は、仏陀が苦行の末、体得した普遍的真理である⁷。仏陀の教えには理性が前面に出されており、真理（四諦）の把握そのものが、まず理性的に知ることから始まるといわれている。こうした教えは、まさに理性的な思考

を重んじるキット・ペンと重なる。

キット・ペンが仏教の影響を受けているということは、その創始者であるコーウィットみずから認めている⁸。それはまた、タイの教育省も認めるところでもあり、同省ノンフォーマル教育局作成の『生涯学習ディレクトリー（第1巻）』はキット・ペンについて次のように説明している。つまり、キット・ペンのコンセプトは「人生は苦である」という仏教思想から来ている。苦しみ、つまり生活上の問題を解決するには、その原因を知らなくてはならない。そのためには、それなりの思考プロセスの形成が必要なのである。そのプロセスとは、問題について考え、分析し、問題解決への方途を探ることである⁹。

このようにキット・ペンが産まれた背景には、タイで長年にわたり醸成されてきた仏教文化があり、それはタイ社会で独自に生成された学習概念であるといえる。しかし興味深いことに、多民族社会のタイにおいてキット・ペンは仏教徒以外の民族にも適用され、全国的に普及した教育プログラムでもある。タイ国内には、マジョリティではないが、仏教以外の宗教の信者も多数存在し、あらゆる民族を対象に国家的な教育政策が施行されてきた。キット・ペンも例外でなく、全国規模の識字教育キャンペーンの一環として仏教徒以外の人々に対しても適用されたのである。現在でも、コーウィットの薫陶を受けた教育省職員が地方のノンフォーマル教育センターでキット・ペンに則った教育活動に従事しており、なかでもタイ北部でキリスト教等を信仰しながら暮らす少数民族やタイ南部でイスラム教を信仰する人々はキット・ペンを活用した学習活動に積極的に参加している¹⁰。

往々にして国家レベルの教育キャンペーンは、多様なターゲット・グループを一元的にとらえ、一律のプログラムをもって推し進められることが多い。しかし、キット・ペンは仏教的な価値観から生まれたプログラムであるにもかかわらず、多様な対象を一括りにせ

ず、各々の価値体系を尊重しながら展開され、様々な民族に受け容れられてきたと言われる。こうした実践を可能にする特性について考察するために、本研究では二つの調査を実施した。

3. キット・ベンの諸特性

3-1. 調査の概要

本研究で実施した調査は、調査対象によって二つに分けられる。ひとつはノンフォーマル教育センターの代表（センター長）を対象に行った郵送調査およびインタビュー調査であり、もうひとつはボランティア教師¹¹を対象に行った郵送調査およびインタビュー調査である。以下、便宜上、前者をA調査、後者をB調査と呼ぶ。

A調査の対象は、タイ国内のすべてのノンフォーマル教育センターの代表、すなわち、全県およびバンコク市内にあるノンフォーマル教育センター長78名および県レベルのノンフォーマル教育センターの上位機関である地域レベルのノンフォーマル教育センター長5名、全国のノンフォーマル教育センターの中でも中枢的な機能を担うシリドーン継続教育開発研修所長1名の合計84名である。調査方法は自記式郵送調査であり、調査結果をもとに対象を絞り込み、インタビュー調査も実施した。調査の目的は、第一に、各地で教育政策の実施に携わるノンフォーマル教育センター長らがキット・ベンをどのようにとらえているのかを尋ねることにより、キット・ベンの特性について政策に従事する者の視点から明らかにすることであり、第二に、個々の回答を参照してB調査の対象地域を選定することであった。A調査は1999年2月から3月にかけて行われ、回収率は81.0%であった。

B調査は質問紙調査および個別・集団インタビュー調査から成る。その目的は、キット・ベンの諸特性に焦点を当て、クロス・カルチュラルな視座からその意義を明らかにする

ことである。B調査の対象は、北タイのチェンライ県と南タイのパタニ県とナラティワート県において地域社会と生活を共にするボランティア教師である（北タイ124名、南タイ208名）。両地域を選んだ理由は双方の地域性、すなわち、仏教徒以外の学習者と彼（女）らを教える教師がキット・ベンを活用しており、こうした人々が仏教原理に基づく学習をどのように捉えているのかを明らかにできると考えたからである。北タイの場合、学習者にキリスト教徒やアニミズム信仰をもつ少数民族が多く、南タイの場合、イスラム教徒が大半を占める。調査方法は自記式郵送調査であり、北タイの調査は2000年1月から3月にかけて実施され（回収率95.4%）、南タイの調査は2000年3月から4月にかけて実施された（回収率96.7%）。

3-2. 宗教的側面と科学的側面

キット・ベンについての調査を進める中、しばしば気づかされることがあった。それは、キット・ベンを仏教的な学習理論であると認識している者もいれば、西欧的、より限定して言えば、学習者中心の進歩主義教育的な学習理論であると認識している者もいるということである。また、キット・ベンは仏教的でもあるし西欧的でもある、とどっちつかずの返答をする者も少なくない。この点を明らかにするために、A調査において「西欧的である」「仏教的である」「西欧的でもあれば仏教的でもある」「西欧的でも仏教的でもない」の四つの選択肢からひとつを選んでもらう形でキット・ベンの捉え方について聞いてみたところ、回答の内訳は、「西欧的である」と答えた者が0%、「仏教的である」が42.6%、「西欧的でもあれば仏教的でもある」が50.0%、「西欧的でも仏教的でもない」が4.4%であった。この結果から、大半の専門家がキット・ベンを「仏教的である」もしくは「西欧的でもあれば仏教的でもある」と見なしていることが分かる。ここで興味深いのは、キット・

ペンを「西欧的」と見る者は一人もいなかったにもかかわらず、「西欧的でもあれば仏教的でもある」を選択した者が相当数存在し、その割合は「仏教的である」を選んだ者の割合を上回っていることである。少なくともその誕生の背景には仏教の影響が歴然と見られるキット・ペンであるが、何らかの理由をもって西欧的であると認識している者が少なからず存在している。では、彼（女）らはその根拠をどこにおいているのであろうか。次に、各々の設問の回答理由を見てみたい。

「仏教的である」として見なす者は、その理由として「因果関係（原因と結果）」もしくは「理性」を指摘する者が多く、どちらか一方または双方に言及した者は、「仏教的である」に回答した29人中19人であった。例えば、「仏教的思考法は理性に基づく。いかなる運命を私たちがもっているように、それは自身の行為の結果であり、『自分で蒔いた種は自分で刈ることになる』」（53歳、男性）、「仏教が人々に教えるのは、問題がいかに起きたか（原因）ということ、さらにいかにしてそれを解決するのかということについて知識と知恵をもって批判的に考えることである」（51歳、女性）、「キット・ペンは因果関係を分析することを強調しており、自己や文献や社会について熟慮することによって決定を行う」（40歳、女性）といった回答が挙げられる。確かに仏陀の重要な教えの一つが事実を理性的に知ることであったのはよく知られており、その教えとキット・ペンの基底にある思想とは繋がっているといえよう。また、理性や因果関係を強調するがゆえに、キット・ペンを「科学的な思考法」として把握する者もいた。一方、「西欧的でもあれば仏教的でもある」と捉える者は、その理由として、「西欧式の問題解決プロセスをここ（筆者訳注：タイ）で応用している一方で、仏教原理である『中道』を強調している」（58歳、男性）、「キット・ペンは技術的・教育的発展のための思考法であるが、善や徳について教える仏教とも似て

いる」（52歳、男性）、「西欧の概念としては、キット・ペンは系統的で客観的な思考プロセスを強調し、仏教的概念としては、それは自己満足または自己充足し、社会と環境との調和の内に暮らすことを強調する」（43歳、男性）、「仏教は慎重な思考を重視する宗教であり、それは善なるものの考え方からはじめられる。一方、西欧的概念は科学的な思考プロセスに焦点を当てている」（49歳、男性）等の指摘がある。つまり、ここでは西欧的側面が問題解決という系統的な「思考プロセス」等に代表される科学性に、仏教的側面が「中道」や「善・徳」などの道徳性に結びつけてられている。また、「双方ともに科学的思考法である。すなわちいかなることを考える際にも、またいかなることを行う際にも、問題とその原因、解決法、そのための行動を見出すことから始めるから」（59歳、男性）というように、西欧的側面も仏教的側面もその共通項として「科学」性が指摘されている。

3-3. 文化を越境するキット・ペン

質問票に対する回答やインタビューでの返答等を見ると、キット・ペンを西欧的であると見なす人々の論拠はいくつかに分けられる。

第一に、科学性である。理性を重んじるキット・ペンは客観性を指向する思考プロセスであり、したがってそれは科学的であり、その科学的特性を西欧文化の一特性として認識する者は少なくない。

第二に、問題解決学習理論と深く関連する学習者中心の教育である。タイの教育省職員の中には、キット・ペンは西欧の進歩主義教育やピアジェやブルーナーの影響を受けながら発展してきたコンセプトであると主張する者もいる¹²。質問票に対する回答の中にもキット・ペンを学習者中心の教育観と重ねる見方が少なくない。A調査での「キット・ペンの理念は今でも活かされていますか」という質問に対して9割以上の者が「はい」と答えたが、その理由の中には「キット・ペンは

ノンフォーマル教育での教授—学習活動に、特に生徒中心の学習に活用されており、その結果、学習者はいかに問題を考え、解決するかを学ぶのです」(55歳、男性)というように学習者中心の教育観を指摘する見解が見られた。キット・ベン研究者として知られるチュラロンコーン大学教授のウーントもまた、キット・ベンは問題解決の学習法という側面を見れば、きわめて進歩主義教育に近いのであり、参加型学習という側面では、現在の参加型開発理論にも通じるところがある、と述べている¹³。

第三に、ヒューマニズムである。ウーントによれば、キット・ベンは西欧で継承されてきたヒューマニスティックな思想とも深く関連している。近代西欧で生まれたヒューマニズムによれば、あらゆる価値の原理や道徳性の根底にあるものは、人間の選択であり、人間は本来自由な存在である。人間の自由と自立を認め、人間は自らの運命を選択する自由があるとすると、西欧思想の一潮流であるヒューマニズムに通じる考えがキット・ベンの基底にあるとウーントは指摘する¹⁴。

以上のようにキット・ベンには「西欧的である」と見なされるだけのエレメントが内包されているといえよう。しかし、西欧的な特性を有するからといってキット・ベンはタイ国内のキリスト教徒にも受け入れられていると判断するのは早計にすぎる。というのも、キット・ベンは、キリスト教徒のみならずイスラム教徒などの民族にも適用されてきたからである。むしろここで重要なのは、ある宗教や文化への属性をキット・ベンに見ようとするのではなく、特定の宗教や文化を超えた多元的な特性を見出すことではないだろうか。西欧的であるとされたキット・ベンの特性はいずれも仏教の特性とも緩やかに重なる。科学性は理性や客観性にも通じ、これらの特性は仏教でも重要視されている。A調査の質問紙に対する回答者の中には、理性を重んじる仏教を科学的であると見なす者、さらに科学

性を仏教と西欧との双方に共通する特性であると捉える者も少なくなかった。また、学習者中心の教育観、特にその「問題解決」の側面は、仏陀の教えた、自ら真理を探求しようとする人生態度とも重なる。さらにヒューマニズムは、人間の自由を基調とする西欧近代思想のみならず人間の自立を説く仏教思想にも通じる。仏教の教えによれば、人間の苦悩は人類共通の運命であり、自身の運命から自らを解放することができるというように、人間の自立が説かれている。要するに、ここで西欧的とされるエレメントは少なくとも仏教の、おそらくは多くの宗教にも見られるであろう、いわば多元的な特性であり、それゆえにキット・ベンは宗教を問わず多くのタイ国民に適用され得たのではないだろうか。

確かに次の理由で、キット・ベンの仏教的側面と西欧的側面に厳密な意味での一致は見られない。A調査の質問に対する回答者の中には、キット・ベンの理性を、西欧近代の分析的理性、すなわち客体を分析し、自己と相対し、道徳的に反省することが近代人の使命である、という考え方と一致させている者がいる一方で、仏陀の教えに則り、内省的に自己との対話を重視する仏教的理性と一致させている者もいる。いうまでもなく、宗教的世界を超克しようとし、現世的な人間のあり方を希求してきた西欧の近代理性と内省的側面を重んじる仏教的な理性とは根本的に異なる。同じ「考える」にしても、前者では地上(此岸)的な人間のための思考が、後者では内省的な精神レベルでの思考が求められるからである。この一致ならぬ重複は、理性のみならず、ヒューマニズムや問題解決というエレメントについても見られる。キット・ベンの認識において、ヒューマニズムに関しては西欧的な人道主義と仏教的な慈愛とが、問題解決に関しては西欧心理学的な試行錯誤学習と仏教的な求道的態度とが水と油のごとく共在し、一人物の認識の仕方の中に両者が混在していると思われるケースも少なくない。

しかし、これらの諸々のエレメントは仏教や西欧キリスト教など特定の宗教・文化のみならず、各宗派や文化の枠を超えて緩やかに共通するエレメントであるといえるのではないだろうか¹⁵。タイ北部の少数民族をはじめ、南部のイスラム教徒など、諸文化を横断して実践されてきたキット・ペンは、各々の文化の流儀で各エレメントを解釈できるだけの緩やかなフレームワークであると同時に、人間にとって普遍的テーマともいえる幸福に向けた共通の営みでもある。

3-4. 〈メソッド〉としてのキット・ペン

図1に示したとおり、キット・ペンにはいくつかの属性が見られる。では実際に、各属性はどの程度重視されているのであろうか。B調査では、図1に示される諸々の属性にいくつかの特性を加え、「あなたがキット・ペン学習法を利用する際、次のうちのどれを強調しますか」という多肢選択式の設問をボランティア教師たちに尋ねてみた(図2)。

図2を見ると、「問題解決」や「3種類の情報」、「目的としての幸福」が強調されている一方で、「科学的思考法」や「仏陀の教え」、「創始者コーウィット」はそれらほどまでには強調されていないことが分かる。相当数のボランティア教師はキット・ペンの宗教的な側面よりも実際の生活(人生)に役立つ実践

的な側面、つまり図1に示した各項目を重視しているといえる。

1970年代にキット・ペンが「全国識字キャンペーン」の基本理念として掲げられて以来、関連事業の推進に携わってきた教育省および国家教育委員会職員にも同様の質問をインタビューで尋ねてみた。キット・ペンの創出当初からコーウィットの下でキット・ペンの普及に従事し、現在もチェンライ県ノンフォーマル教育センターで北タイの少数民族を対象にキット・ペンに則った教育プログラムの普及に努めるダムリ・ジャナピラガニットは「少数民族の人々にキット・ペンについて説明するとき、キット・ペン哲学は仏教に基づくなどとは言いません。むしろ肝要なのは問題解決的な側面であり、仏教的な側面を特別に強調しなくてもよいのです」と述べている¹⁶。また、北タイの少数民族を対象にしたノンフォーマル教育を展開しているチェンマイ県ノンフォーマル教育センター長のウィチャイ・ロヴィラーズは、「キット・ペンはカレン族などのキリスト教等を信仰する民族に対しても有効ですか」という筆者の質問に対して、「キット・ペンの実践にとって信仰の違いはまったく問題ではありません。重要なのは、批判的に思考できるようになり、実際に日常生活で問題を解決し、幸福になることです。プロジェクト実施の際、キリスト教

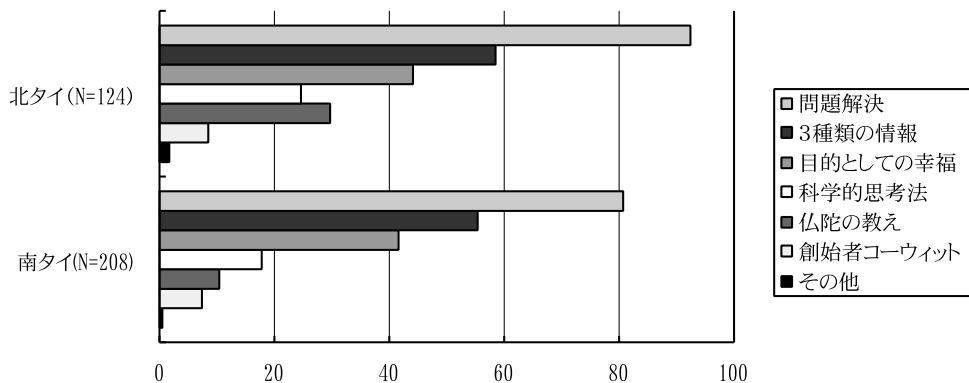
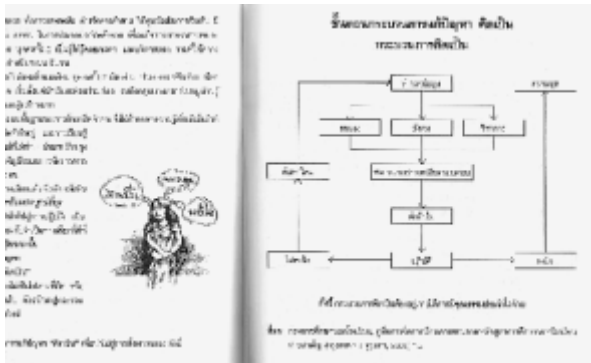


図2 キット・ペンで強調される諸要素(%)

徒らからの反対などまったくありませんでした」¹⁷と答えている。さらに南部地域ノンフォーマル教育センターの人的リソース開発部でイスラム教徒に対してキット・ペンを用いたプログラムを展開しているカヌン・カンチャナブチャは「キット・ペンは仏教の教えというよりも、仏教で言うところの『アリヤサッシー（真理）』に基づいており、それはイスラム教や他の宗教でも言われている真理と等しいと言えるでしょう」¹⁸と指摘し、同センター長のアリーフェン・アブドゥール・カディールも「キット・ペンは仏教に基づいた概念ですか。」という質問に対して、「確かにそうかもしれませんが、たとえそうだとしてもキット・ペンを私たちは問題解決学習の手段として使っています。だからキット・ペンはイスラム教徒の学習者にも違和感なく使えるのです。この地域での教員養成コースでもキット・ペンの説明はしていますが、それが仏教に基づくなどとは一切述べません。」¹⁹と語っている。

これらの言葉が示唆するように、キット・ペンはタイ国内の諸民族にも活用されているが、仏教の教えに基づく教育内容としてではなく、あくまで日常生活上の問題解決のための手段として捉えられる傾向があるといえよう。この点、ウーンタは次のように語っている。「キット・ペンの生みの親はコーウィット氏ですが、彼は国際会議で発言してきたからか、それほど仏教を強調しませんでした。（中略）キット・ペンは四諦等の仏教の教えを思い起こさせる概念ではありますが。（中略）同時にキット・ペンと西欧の進歩主義等の主張とは重なるところがありますが、この両者の一致は偶然かどうかは分かりません。結局、キット・ペンは仏教的なものと同様に西欧的なものがコンパインされた概念ではないでしょうか。（中略）仏教徒以外にもキット・ペンは機能するでしょう。なぜなら、人間だれでも考える（「キット」：引用者註）のですから。イスラム教徒や仏教徒の別に関わりなく、人間なら誰でも自分や自分の社会に関心がある



◀写真1 キット・ペンを活用した北タイの教材。成人教育の一環として少数民族の学習者らがエイズをテーマにキット・ペン方式で学んでいる。（Damri Janapirakanit. et al. (1998), pp.26-27.）

▶写真2 キット・ペンを活用した南タイの学習風景（ナラティワート県の識字教室）。イスラム教徒の女性達がキット・ペンに則った教材を用いて農業の基礎知識等のライフスキルを習得している。



からです。(中略)要するに、キット・ペンはコンテンツではなくメソッドなのです。各地域のもつコンテンツをキット・ペンのメソッドに適用することは可能なのです。」²⁰

キット・ペンをそのコンテンツではなくメソッドとして見るウーンタの指摘は傾聴に値する。実践レベルでキット・ペンは問題解決のためのメソッドとして把握されていることが少なくない。上のインタビューでの返答に示されているように、この傾向は、キリスト教徒やイスラム教徒に対してキット・ペンが適用される場合によりいっそう明らかになる。実際に、北タイでも南タイでも問題解決学習としてキット・ペンは活用されているが、その学習内容は各々の社会・文化的文脈により相当に異なる。例えば、北タイの教材では年々深刻化しているエイズをテーマに、また南タイでは当地の母語であるヤーウィー語のことわざと農業文化をテーマに内容が組まれている。両者が扱う内容はまったく異なるが、双方ともに図1に示した問題解決を学習者に説明し、各々の社会状況に応じる形で課題に取り組んでいるのである(写真1及び写真2を参照)。

4. むすびにかえて:キット・ペンの多元性

以上の質問紙調査ならびにインタビュー調査の結果、次のことが指摘できる。仏教に基づく学習概念として紹介されてきたキット・ペンであるが、関係者の捉え方は多様であり、仏教的としてのみ捉える者がいる一方で、西欧的でもあると認識する者も少なくない。さらにキット・ペンが仏教徒以外の民族の教育に適用されるとき、その仏教的色彩は薄れ、フレームワークとしての問題解決機能が強調され、その内容は各々の民族の社会・文化的文脈の中で独自に規定される。問題解決という誰しが必要とする技能に照準を合わせることによって、あらゆる文化への適用可能性が拓かれているのである。

しかし、はたしてキット・ペンの内実はウーンタの指摘のとおり、「コンテンツではなくメソッド」、つまり方法論に留まるのであろうか。キット・ペンは文化や宗教、民族の違いを横断して適用されているが、その理由は、メソッドという次元とは異なる次元に見出されるように思われる。この点を考えるにあたり、ここでキット・ペンの産みの親であるコーウィットの言葉を引用したい。筆者とのインタビューでコーウィットは次のように語っている。「仏陀はキット・ペンのようなメソッドを用いました。私が考えるには、それは人間にとって自然なものなのです。(中略)キット・ペンは自然な営みです。仏陀は自然にとても近かったのです。キット・ペンは誰でも生まれつき持っているのです。これは西洋から、これは東洋から、などとは言えないのです。洋の東西を問わずキット・ペンは人間のためなのです」²¹。

見方によっては、「全国識字キャンペーン」の基本理念として掲げられたキット・ペンを、タイ北部の少数民族や南部のイスラム教徒に対して国家への帰属意識をもたせるために設定されたプログラムとしてとらえることもできる。しかし、提唱者であるコーウィットにとってキット・ペンは「国民」ではなく、「人間」のためのプログラムであったことは強調されてよい²²。

このようなキット・ペンに内在する〈人間観〉に目を向けてはじめて、普遍主義でも相対主義でもない、多元主義と呼ぶに相応しい内実が見出されるように思われる²³。あるイデオロギーを他に強要するのでもなく、相対的な距離をおきながら他を傍観するのでもない。個々の社会の諸価値を認めながら、人間一人ひとりの幸福や問題解決という共通の横糸で異なる文化の縦糸を紡いでいく多元的特性がキット・ペンには見出せる。これは、エリクソン(1977)の指摘する「種々のアイデンティティを統一する、より広い、より包括的な一つのアイデンティティ」や西平直

(1993)の「アイデンティティを越えたアイデンティティ」、吉田敦彦(1999)の「多様な文化を貫く根拠力」等にも繋がる特性であるといえよう。

確かにPRA(参加型農村調査法)などの近年の開発理論は、一種の問題解決学習法を様々な文化圏に適用している事例として見る事ができる。しかしそこには、効率性や能力、効果という経済至上主義的なグローバリゼーションに絡めとられ、いつのまにか個人の意味充実が疎かにされる陥穽があるといえないだろうか。その点、キット・ベンでは個人個人の「幸福」という内容無規定ではあるが明確な目標があらかじめ設定されている。マクロ・レベルでの経済開発に資する「問題解決」よりも一人ひとりの福祉(well-being)のための問題解決が前提なのである。したがってキット・ベンには、一様な開発を促進する〈メソッド〉としてではなく、個人個人の多様な発展のあり方を包摂できるだけのフレームワークとして機能する素地があるといえよう。グローバリゼーションを促進する経済至上主義による一元的なモードとはまったく別様のモード、すなわち地域固有のローカルリティにきめ細やかに対応できるだけの柔軟なフレームワークといふこの人間社会にも対応できるような緩やかな価値観をもって多元的な発展を促す可能性をキット・ベンには見出すことができる。あらゆる領域において特定の世界標準が席卷する傾向にある現代のグローバル社会において、キット・ベンは希少な多元的学習概念であり、こうした事例にこそ、世界標準への馴化に対する建設的な捉え返しの契機が見出せるのではないだろうか。

註)

¹ 一般に、トルーマン米大統領の就任演説(1949年)以後、開発至上主義ないし開発一元論が世界を闊歩するようになったといわれるが、先進国や国際機関主導の開発が教育分野で本格的に

はじまったのは1960年代である。その代表的な国際事業として実験的世界識字事業やカラチ・プランが挙げられるが、とりわけ前者は教育開発の功罪が問われた最初の国際事業のひとつであった(UNESCO/UNDP:1976)。

² 例えば Leach and Little:1999を参照。

³ コーウィットのいうところの「自己」「社会」「環境」の定義は文献上では明確に示されていない。この点についてコーウィットに直接聞いてみたところ、「自己」と「社会」とは対峙するものであるが、「社会」は「環境」と比べてより人為的であり、「環境」はほぼ「自然環境」と同義であると述べていた。(1999年3月10日、インタビュー:以下、「インタビュー」はテープレコーダーによる録音記録を、「インフォーマル・インタビュー」はフィールドノートによる記録を指す。)

⁴ チュラロンコーン大学のキット・ベン研究者であるウーント・ノパクンによれば、こうした情報の区分けはキット・ベンのオリジナルな概念にはなかった。もともとキット・ベンの概念は、個人と自らの環境との間に調和を達成するために形成されたのである。しかし、チャン・チューン＝ムアンバックが的確な決定を行うための三つの情報に関する概念を規定し、影響を与えたという。(Oonta 1985:29)

⁵ 収入向上のための新しい技術の導入や協同組合への参加など、3種類の情報を併用するいくつかの事例をウーント・ノパクンは挙げている。(Oonta 1985:Chap. 3)

⁶ 一般には「気にしない」という意味合いで恐縮している他者等に対して用いられる日常用語である。文脈により「なるようになる」、「構わない」等の投げやりな心持を表すときにも使われる。

⁷ この真理とは、苦諦、集諦、滅諦、道諦から成る四諦(四聖諦)であり、生活上の実践として、四諦を正しく把握(正見)し、四諦の理によって思索(正思)し、正しい智慧にもとづき、それに反した言葉を使わず(正語)、清浄な行い(正業)をし、正しい生活(正命)をし、涅槃にいたる努力を継続(正精進)し、邪念をはなれ正しい道を祈念(正念)し、精神を集中し安定して迷いの無い境地に入る(正定)、という八つの道(八正道)を重視する。

⁸ 1999年3月10日、インタビュー

⁹ Department of Non-formal Education, 1984. p.

299

- ¹⁰ 代表的なセンターとして、本研究で取り上げたワールドの教育事業を管轄する二つのセンター、つまり、タイ北部のキリスト教徒や土着信仰の少数民族を対象に識字教育事業を行っているチェンライ県ノンフォーマル教育センターとタイ南部のイスラム教徒を対象にしたソクラー県ノンフォーマル教育センターが挙げられる。
- ¹¹ タイには教育省管轄のノンフォーマル教育センターが全国的に教育活動を展開しており、識字教育や成人教育分野等で多くの成果を挙げてきた。教育活動に専心できるように村の学校に住み込み、村人や子ども達と生活を共にしているのが、各センターから派遣されているボランティア教師である。
- ¹² コーウィットのもとでキット・ベンの普及に携わり、長年タイの教育省でキット・ベン関連のカリキュラムの作成・普及に務めてきた元カリキュラム・教授法開発局長のサンゴブ・ラクサナ教育省事務次官補は、キット・ベンの進歩主義教育的特性を重視する政策策定者の一人である(1999年2月28日、インフォーマル・インタビュー)。
- ¹³ Oonta 1985. pp. 60-62.
- ¹⁴ Oonta 1985. pp. 24-25.
- ¹⁵ 同様の議論として、西欧社会のみならず中国やインドの伝統思想の中にも人道主義と深く関連する自由や寛容等の多様な見解を発見できると主張するA・センの指摘が挙げられる(A.Sen 2000. pp. 227-248)。
- ¹⁶ 1999年2月26日、インタビュー。ダムリを中心に展開されているエイズ撲滅事業にはキット・ベンが積極的に活用されている(Damri, et. al. 1998)。
- ¹⁷ 1999年2月24日、インタビュー
- ¹⁸ 2000年3月4日、インフォーマル・インタビュー
- ¹⁹ 2000年3月6日、インフォーマル・インタビュー
- ²⁰ 1999年3月8日、インタビュー
- ²¹ 1999年3月10日、インタビュー
- ²² 裏を返せば、キット・ベンのような、いわば内発的発展的なプログラムは国家ヘゲモニーにも取り込まれる性質が多分にあることは指摘されてよい。内発的発展論には国家権力に対する視座が欠けているとの指摘がとにあるが(宇野・鶴見1994, 229頁)、これは、キット・ベンのような多元的プログラムの課題でもある。

- ²³ ウーンタによれば、コーウィットはキット・ベンをひとつの絶対的なメソッドとして普及しようとはしなかったという。(1999年3月8日、インタビュー)

〔引用・参考文献〕

- 今村仁司(1998)『近代の思想構造：世界像・時間意識・労働』人文書院。
- 宇野重昭・鶴見和子編(1994)『内発的発展と外向型発展——現代中国における交錯』東京大学出版会。
- 川田順造ほか編(1998)『開発と民族問題』(岩波講座「開発と文化4」)岩波書店。
- 中園優子(1991)「タイにおける識字教育の特質と問題点—キット・ベン政策の分析を通して—」『比較教育学研究第17号』。
- 中村元(1994 [1981])『佛教語大辞典』東京書籍。
- 西平直(1993)『エリクソンの人間学』東京大学出版会。
- 森部一(1998)『タイの上座仏教と社会——文化人類学的考察——』山喜房佛書林。
- 吉田敦彦(1999)『ホリスティック教育論——日本の動向と思想の地平——』日本評論者。Adult Education Division, Department of General Education, Ministry of Education. (1979) *Developing Vocational and Rural Technology Education Programs : Report on a Field Operations Seminar held at the Norhteast Regional NFE Development Center, Ubol Province.*
- Damri Janapirakanit, et. al. (1998) *Khaaniyon Thaang Saykhon Phua Kee Panhaa Soopheeni Dek. Learning Institution for Developing Quality of Life/Asian Women and Children's Network.* 『児童売春問題の解決のための社会的価値』
- Department of Non-formal Education, Ministry of Education. (1976) *Beeprian : Khroongkaan Ronnarong Phua*

- Kaanruumangsuu Hengchaat* 『国家識字キャンペーン事業テキスト』.
- (1984) *Saaramukrom Kaansuksaa Talootchiivit (lem1)* 『生涯学習ディレクター (第一巻)』.
- (1987) *Thailand's Experiences in the Promotion of Literacy*.
- (1988) *Case Studies on the Causes and Consequences of the Persistency of Illiteracy in Thailand*.
- Erikson, E. H. (1977) *Toys and Reasons : stages in the ritualization of experience*.
- Leach, Fiona and Little, Angela (eds.). (1999) *Education, Cultures and Economics : Dilemmas for Development*. Falmer Press.
- Oonta Nopakun. (1985) *Thai Concept of Khit-Pen for Adult, and Non-formal Education*.
- Sen, Amartya. (2000) *Development as Freedom*. Alfred A. Knopf.
- UNESCO/UNDP. (1976) *The Experimental World Literacy Programme : a critical assessment*. The Unesco Press.

〔謝 辞〕

本小論，特に第4節の執筆はキット・ペンの産みの親であるコーウィット氏との面会なくしては不可能であった。氏が2000年12月に他界する2年ほど前のことであるが，当時上院議員としての多忙な生活の中，インタビューに時間を割き，一つひとつの質問に対して誠意をもって応えて下さった。この場を借りて心より感謝の念を表し，氏のご冥福をお祈り申し上げます。

A Study in the Theory and Practice of ‘Khit Pen’ Learning Concept in Thailand — Focusing on its Pluralistic Feature —

Yoshiyuki NAGATA

National Institute for Educational Policy Research of Japan

In Thailand it was in the 1970s when a national literacy campaign with a learning concept named ‘Khit Pen’ was launched. It started as an endogenously developed learning concept mainly for adult learners who learn out-of-school situations, but it has later become a popular methodology in formal education as well.

According to some documents and the present author’s interview to Dr. Kowit, an initiator of Khit Pen, it can be said that the Khit Pen concept is strongly influenced by Buddhism. Nonetheless, Khit Pen was introduced as part of a national literacy campaign and it has been applied to learning practices of people who believe in other religions such as Christianity or Islam.

Based on the results of the surveys and interviews conducted by the present author in the Northern and the Southern regions of Thailand, this paper stresses upon the following points : Khit Pen is being conceived as a learning process for problem-solving rather than religious ideology, especially when it is applied to educational situations of other peoples than Buddhists.

Then the paper examines some significant characteristics of Khit Pen including scientific character emphasizing causal relationships and humanism. Additionally, the paper emphasizes the importance of learning from the philosophical aspect of Khit Pen. Nowadays such development methodologies as PRA (Participatory Rural Appraisal) or RRA (Rapid Rural Appraisal) have become popular among such developing agencies as international organizations and NGOs. It goes without saying that these methodologies are essential to the development of citizens’ lives especially in less developed countries. However, attention should be paid to their weaknesses as well as strengths, that are, tendencies to become part of economic-oriented globalism. On this point, Khit Pen with its clear objective of ‘individual happiness’, can serve as a warning to people involved in developing projects/programme.

Finally the paper attempts to stress the pluralistic aspect of Khit Pen that has made the learning process accepted by many religious groups in Thailand.